

目的 高層住宅街区の遊び場における子どもの行動を観察し，そこから高層地区特有の子どもの行動型を発見し，高層住区デザインに資することを目的とする。

方法 調査日は第1回（夏）は1991年7月26日（金），28日（日），29日（月）の3日間，第2回（冬）は1991年12月1日（日），2日（月），3日（火）の3日間である。時間帯は，子どもの遊ぶ日中の全時間が相当する。六甲アイランドシティ内でもっとも子どもの多く集まる街区内遊び場2箇所と児童公園1箇所において，特定の子どもの行動を追跡観察することとした。同時に実施したアイランドシティ内の全遊び場における，数読み調査結果と合わせて考察することとする。

結果 小学校高学年児童は，学習塾での勉強は確認されたが，組織的なスポーツ活動以外の，自然発生的な屋外遊びをする姿はほとんど見かけない。低学年児童および4～5才児では，屋外へ出やすい住棟であるかどうかと，遊び行動とは密接な関連があることが観察される。すなわち，出やすい住棟では出入りが激しい。3才以下の幼児の場合，砂場はもっとも魅力ある遊び場であり，ブランコなどの遊具と組み合わせて，飽きずに遊び続ける。高層街区の特徴として，3才以下の幼児では必ず付添いの親がおり，そのため，平日の夕刻など特定の時間では，おとなと子どもの数がほぼ同数になるくらい多数の母親の姿が観察される。母親どうしの交際も盛んで，遊び場が若い母親の社交場となっている。弁当や水筒持参で，3～4時間にわたる長時間，遊び場に滞在するケースもある。自宅へ用便に戻るの面倒なため，そこそこで幼児に「おしっこ」をさせている様子が観察された。